

# 備後「草津」と御家人長井氏

## 領主拠点としての港湾集落

Bingo “Kusazu” and the Nagai Family : A Port Town as a Feudal Lord’s Base

鈴木康之

SUZUKI Yasuyuki

はじめに

- ①草戸千軒町遺跡の概要
- ②集落と武家領主との関係
- ③出土資料が示す領主拠点

おわりに

### 【論文要旨】

草戸千軒町遺跡は、広島県福山市に所在する13世紀中頃から16世紀初頭にかけて存続した集落の遺跡である。この集落は福山湾岸に位置する港湾集落で、鎌倉時代には「草津」、室町時代には「草土」などと呼ばれていたと考えられる。遺跡は、文字資料では明らかにしなかった中世における民衆生活の実態を明らかにしたことが評価され、集落の住人は文字資料に記されることのない庶民が主体であったと考える傾向が強かった。しかし、発掘調査の成果にもとづき、集落の変遷過程を地域社会の動向のなかに位置づけていくと、集落の成立・停滞・再開・終焉といった画期に、武家領主の動向が大きく影響をおよぼしていたことが考えられるようになった。

本稿では、13世紀中頃から14世紀前半の鎌倉時代後期における集落変遷の背景に、鎌倉幕府の御家人で備後守護や長和荘地頭に任じられていた長井氏が関与していたことを想定した。発掘調査した集落の中核に位置する「中心区画」と呼ぶ区域の出土資料に注目すると、井戸には当時最も「格」の高い場所に存在した多角形縦板組の井側をもつものが集中し、木簡からは近隣地域との商品・金融取引の拠点として機能していたことがうかがえる。また、当時最先端の文化活動であったと考えられる闘茶が行われていたことを示す闘茶札が、中国産天目茶碗・茶入をともなって出土し、白磁四耳壺・青白磁梅瓶・吉州窯系鉄絵瓶子といった座敷飾りの陶磁器も出土している。ここに、「会所」に比定できる施設が存在していたことが想定できる。

以上のような「中心区画」の卓越性は、この集落が武家領主の地域支配の拠点であったことを示していると考えられる。

【キーワード】 草戸千軒町遺跡, 中世港湾集落, 長和荘, 地域経済拠点, 闘茶